

自己評価報告書

平成23年 5月10日現在

機関番号：34502

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520603

研究課題名（和文） 沖縄施政権返還をめぐる社会運動・思想の研究

研究課題名（英文） A Study on the Social Movements and Thought over the Administrative Reversion of Okinawa

研究代表者

森 宣雄 (MORI YOSHIO)

聖トマス大学・人間文化共生学部・准教授

研究者番号：20441157

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本近現代史、沖縄学、オーラル・ヒストリー、社会思想史、社会運動史、日米関係史、グローバル・ヒストリー、歴史哲学

1. 研究計画の概要

本研究は、資料収集・関係者のオーラル・ヒストリー調査などを行なって研究基盤の整備を進めながら、米国統治下の沖縄戦後史（1945－72年）、特にその最終段階となる施政権返還期（1969－72年：日米両国による沖縄施政権の返還決定から返還実施まで）における社会運動とその思想経験の独自性を明らかにし、併せて研究代表者の10年来の沖縄戦後史研究を集大成させ、その成果を東アジアの近現代史をめぐる国際的な討議空間に向けて発信しようとする取り組みである。

2. 研究の進捗状況

(1)資料収集・オーラル・ヒストリー調査

沖縄県における資料収集および関係者へのインタビューによるオーラル・ヒストリー調査は、順調に進んでおり、それらをもとに研究成果の図書2点などを公刊している。なお、研究申請時の当初計画では米国の公文書館で収集する予定だった米軍の沖縄統治資料は、沖縄県公文書館がすでに収集・公開しており、これを利用することで海外出張を行なう必要はないことが判明した。

(2)沖縄戦後史の思想的独自性の解明

本研究の中心的課題である、沖縄戦後史の思想的独自性については、現時点では次のようにまとめられる。国家の帰属が不明瞭にされ、長期にわたり主権国家の保護の範囲外に置かれる厳しい経験の中から、沖縄・奄美では、国家や主権性に頼らずに世界に連帯を求

める社会運動の思想と政治的主体性を構築してきた。何らかの国家や民族主義や党派性を媒体とせずに、生活者の視点から直接的に世界につながり、公正な世界のあり方を訴えていく、その思想・運動経験は、主権国家の排他的な域内支配の集積によって構成される近代世界の国家間システムとは異なる世界像を提起するものだと考えられる。

(3)世界史・歴史哲学の文脈における検討

上記の沖縄戦後史の独自性を、より広い文脈にどう位置づけるかについては、東アジアの比較政治史に留まらず、人類規模の世界史と歴史哲学上の問題に位置づける作業に着手するようになった。

(4)成果の公表

研究成果の公表について、研究申請時の当初計画では、類似の歴史経験を持つ韓国・台湾などの研究者との国際討議を通じて、沖縄現代史の独自性を学界・社会に伝えていく方法を予定していた。だが研究期間中の2009年の政権交代後、沖縄の基地問題が日本の外交・内政にわたる一大争点となったため、メディアや社会の求めに応じて、直接に社会に研究成果を伝えていくことになり、結果として多くの成果を公表することができた。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由)

資料収集・インタビュー調査を順調に進められたばかりでなく、研究成果を学界や社会

に公表する機会が、当初予想を上回って与えられ、質・量ともに当初計画以上の成果を上げることができている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 沖縄戦後史の後半部分の検討

現在までの研究成果の公表は、沖縄戦後史の全体像を捉えるために、研究対象とする1945年～1972年のうち、1945年～56年と1969年～72年に収斂させた形になっている。そのため今後は1956年～72年の沖縄戦後史後半部分について、あらためて実証的な研究成果をまとめていく。

(2) グローバル・ヒストリー研究

国家・民族・党派性を媒介せずに、地域の暮らしと世界が直接につながるコミュニケーションのあり方という、先述した沖縄戦後史の思想的独自性は、グローバル化の中の新たな人間社会のあり方として近年検討されている「グローバル化」のモデルに通じる、その先駆的事例とも捉えることができる。国家権力とその奪取を中心的争点とした20世紀の政治・社会運動・社会思想とは異なる、こうした新たな社会思想は、日本史においてのみならず、新たな世界史の研究方法であるグローバル・ヒストリー研究の問題関心に接続して位置づけることができる。こうしたことから、当初計画で予定していた国際的学術討議空間での成果発表という課題に関しては、世界のグローバル・ヒストリー学界での成果発表を、新たな方法として追求していく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 森宣雄 「悼みと政治 ―言葉にできない思いへの言葉にならない思い」『インパクション』163号、72-76ページ、2008年、査読有
- ② 森宣雄 「共生の、概念と言説の問題について」聖トマス大学人文科学研究科紀要『人間文化』12巻、184-190ページ、2009年、査読有
- ③ 森宣雄 「沖縄の県内移設反対運動にどう応えるか ―思想的機軸と歴史的展望」『インパクション』172号、36-48ページ、2010年、査読有
- ④ 森宣雄 「沖縄戦後史の分岐点が残したある事件：「国場事件」について」『サピエンチア 聖トマス大学論叢』44号、1-24ページ、2010年、査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007578358>
- ⑤ 森宣雄 「国家の機能低下のむこう岸 ―沖縄から徳之島、日本本土へ」『季刊ピープ

ルズ・プラン』50号、54-62ページ、2011年、査読無

[学会発表] (計2件)

- ① 森宣雄 (世話人・司会) ほか、セッション「沖縄の〈現在〉を思想史からとらえかえす―歴史、現在、そして新たな世界史へ」において「問題設定：沖縄の日本国政参加40年と世界、未来」を発表、社会思想史学会、第35回大会、2010年10月24日、神奈川大学
- ② 森宣雄 「日本を《太平洋》から眺める―ヤポネシア論と歴史の倫理学」立命館大学国際言語文化研究所 秋季連続講座 グローバル・ヒストリーズ トランスアトランティックトランスパシフィック 国民国家から新たな共同性へ、2010年11月12日、立命館大学

[図書] (計2件)

- ① 富山一郎、森宣雄 共編著『現代沖縄の歴史経験 ―希望、あるいは未決性について』青弓社、2011年、総ページ数424ページ
- ② 森宣雄 『地のなかの革命 ―沖縄戦後史における存在の解放』、現代企画室、2011年、総ページ数480ページ

[その他]

- ① 森宣雄 「奄美と沖縄が出会うとき」『沖縄タイムス』朝刊2010年5月27・28日
- ② 森宣雄 「国家の向こう岸へ―奄美と沖縄が出会うとき」『南海日日新聞』朝刊2010年6月30日・7月1日
- ③ 森宣雄 「徳之島・歴史の回廊―「普天間」に揺れる島を行く」『南日本新聞』朝刊2010年7月31日